

聖書：マタイ 4：23～5：3

説教題：心の貧しい者は幸い

日時：2017年1月15日（朝拝）

イエス様の公の宣教が4章17節から始まりました。そして18節以降には4人の漁師たちが弟子として召されたことが記されました。それに続く今日の最初の部分にはイエス様の宣教活動がどのように大きな影響を与えたかが記されています。23節：「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。」ここにイエス様の活動として2つのことが語られています。一つは御国の福音の宣教であり、もう一つは病気等のいやしのみわざです。特にここで強調されているのは後者のいやしのみわざでしょう。これはイエス様とともに神の国が到来していることのしるしでした。本来、神が造られた最初の世界には苦しみや病はありませんでした。それは人間の罪の結果、この世に入って来たものでした。もちろん私たちはある人の病を見て、それはその人の何らかの罪によると考えてはなりません。イエス様はそのような短絡的な考え方を否定されました。しかしこの世に病や悩みがあるのは人間の罪の結果であるというのは聖書が語るところです。その罪の呪いと力の下にある私たちを救い出すために、神はやがてメシヤを遣わすと約束して来られました。そしてそのメシヤであるイエス様が来られたことによって、神の国、神の恵みの支配が現れ始めたのです。そのため、多くの人々がイエス様のところにやって来ました。その噂はシリア全体にまで広がり、イエス様のもとに連れて来られた人々はみな癒されたのです。

さて人々はここで癒しの恵みを受け取りましたが、だからと言って本当の救いを受け取ったとは言えません。ここにいた多くの人々の関心は自分の病気が癒されること、様々な問題が解決されること、それだけだったのではないのでしょうか。それを受け取って「良かった、良かった！」と言って、ただもとの生活に戻って行くだけだったら、神が下さる真の救いにあずかったことにはなりません。続くところにはイエス様の教えが述べられています。一般に「山上の説教」と呼ばれる部分です。5～7章にかけてこの説教が記されて行きます。この説教の最初に語られているのは、真の幸いについての教えです。全部で8つのことが語られています。これらを見て思うことは、ここにある教えは何とこの世が考える幸いと異なっているか！ということです。私たちは一般的にどん

な人を幸いな人だと思うのでしょうか。それは富んでいる人、裕福な人、喜んで笑っている人、自分に自信と誇りを持ち、他の人との競争に勝って、周りから誉められ、賞賛される人、・・・そういった人を思い浮かべるのではないのでしょうか。ところがイエス様がここで言われた真に神に祝福されている人とは、ことごとくその反対です。それは貧しい人、悲しむ人、柔和でへりくだっている人、飢え渴いている人、そして迫害されている人、・・・等々。そこで大事になって来る問いは、私は果たしてどちらの幸いを求めて歩んでいるのかということでしょう。もし多くの人々が幸いだと思うこの世の基準に沿って歩むなら、私たちは神の祝福とは反対方向に進んでいることになります。一見そちらに祝福があるように思って私たちはその道を行くのですが、どこまで行っても、本当の意味での神の祝福はない。幸いを求めているのに真の幸いには行き着かない。そんな私たちにイエス様は神の祝福はどこにあるかを示してくださっています。その道を行くところに神の祝福はあるのです。

その一つ目として語られているのが3節です。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」 どんな言葉も最初の言葉は、特別に重要な意味を持っています。この山上の説教もそうでしょう。この3節は、この後のすべての基調となる言葉であると言えます。そしてこれはいきなり私たちの価値観に挑戦して来ます。私たちは普通、貧しいよりは富んでいる方が幸せだと思います。貧乏よりは金持ちの方が良い。給料やお小遣いも少ないより多い方が良い。しかしイエス様はここで単に「貧しい者は」ではなく、「心の貧しい者は」と言われました。このことはたとえ裕福な人でも「心の貧しい者」になることはできるということを意味します。現実にはそれは非常に難しいということも聖書は同時に語っていますが、すなわち富を持っている人はおごり高ぶり、神に頼らなくなる傾向がある。イエス様がある箇所です。「金持ちが神の国に入るのは何と難しいことでしょう」と言われた通りです。また反対に経済的に貧しくても「心の貧しい人」でない場合もあります。旧約聖書に良く出て来ますが、貧しい人は神にこそより頼むことにおいて有利な状況に置かれていると言えます。金持ちよりもずっと正しい道に進みやすい。しかしそうせずいつも不平不満ばかり口にして神を見上げない人もいます。ですから大事なこと、そしてイエス様がここで言っていることは「心において貧しい人」ということです。

ではこの「心の貧しい人」とはどういう人のことなのでしょう。それは自分の霊的

な貧しさを認め、わきまえ知っている人のことです。神の前に誇れるものを何も持っていない自分。何ら主張できるものを持っていない自分。自分で自分を救うことはできず、自分を見る限り、全く望みのない者であることを認めている。そういう人です。この世はこういう人を幸いだとは考えません。むしろその反対のあり方を賞賛します。すなわち自己信頼と自己確信に満ちている人を高く考えます。私はダメな人間だと認めてくず折れているなら誰も受け入れてくれないし、見向きもしてくれない。だから自分には良いものがたくさん詰まっていて、可能性に満ちていて、将来性があり、有用な人間であることをアピールして行かなければならない。だから自分に自信を持て！プライドを持て！自分ができる人間であることを宣伝せよ！たとえそうでなくても、周りにそう思わせるように取り組み！そのように駆り立てられているでしょう。

この違いにキリスト教の根本的メッセージが示されています。この5章3節が教えていること、それは「神の祝福は私たちが立派な者になって得るものではない」ということです。世の中では偉くなることによって祝福を得ると考えます。祝福を受けるには、それ相応の立派な者にならなければならない。しかしキリスト教はそういう風には言いません。なぜでしょうか。それは神の前で私たちが立派な者になることなどあり得ないことだからです。神の前で胸を張り、自分は立派な人間になったと考えることは大きな間違いであるからです。

いくら人間の間で自信に満ちた人、豊かに着飾った人が賞賛されても、神の前では全くそうではありません。なぜなら神は私たちの本当の状態を知っているからです。イエス様が公の宣教を始めて真っ先にすべての人に語られた言葉は「悔い改めなさい」でした。ですから私たちは「まず悔い改めるべき人間」です。そういう私たちがその言葉に聞かずに、ただ外側を飾り立てても、神は少しも感銘を受けない。中身がないことは神にはよく見えています。私たちもそうでしょう。中身が空っぽなのに外側だけ立派に包装されたプレゼントをもらって喜ぶでしょうか。あるいは中に汚い物がたくさん詰まっているのに、外側にきれいにリボンをつけた箱を差し出されたどうでしょう。私たちに透視能力があり、中まで見ることができたら、そんな贈り物にはうんざりして決して受け取らないでしょう。神も同じです。むしろこの神の前にある私たちにふさわしい態度はその逆です。あまりにも貧しい自分をその通りに認めること。神に賞賛されるようなものは何もないことを認めること。神のあわれみがなければ、直ちに滅ぼされても当然

の者であることを認めていること。これは高ぶりやプライドや自信に満ちた人の姿とは全く反対です。ところがそういう人こそが幸いだ！とイエス様は言われるのです。

なぜでしょうか。イエス様は続けて言われました。「天の御国はその人たちのものだから」と。ビックリするようなお言葉です。自分は貧しくて神の祝福に値しないと心から認める人こそ、天の御国に招待されると言う。これは心の貧しい人も天の御国に入れていただけるという言い方ではありません。心の貧しい人たちだけが天の御国に入ります。心の貧しい人でなければ天国に入れないのです。どうしてこういうことになるのでしょうか。

それはまず聖書に啓示されている世界に唯一の神は貧しい者たちをあわれんでくださるあわれみの神だからです。もしこの世界に唯一の神が、立派でない者は受け入れないとされたら私たちは終わりです。救いはあり得ませんでした。しかし旧約時代から示されて来た神は違います。たとえば詩篇9篇18節：「貧しい者は決して忘れられない。」40篇17節：「私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私の助け、私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。」イザヤ書57章15節：「いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。『わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。砕かれた人の心を生かすためである。』」61章1節：「神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者には良い知らせを伝え、云々」このように聖書の神は、貧しい自分自身を認め、低い心の状態にある者を決してお捨てにならない神、むしろ顧みてくださる神です。

そしてこういう心の貧しい状態にある者だけが神の救いを受け取ります。神は理由もなく、罪ある者、どうしようもない者を祝福することはできません。神はそのことをメシヤを通して、その方の十字架を通してしてくださいます。そのため私たちの心が低くなっていないと、このキリストを受け入れようとはしません。もっと私にふさわしい方法で、もう少しカッコいい仕方で救ってほしいと要求する。十字架のキリストにより頼むなんて嫌だ！と。しかし心の貧しい人にとっては文句なんか言っている場合ではありません。神が私を救い、祝福してくださるために取ってくださる方法なら何でもありがたい受け入れます。そして確かにこんなどうしようもない私の救いのためには、イエ

ス・キリストの十字架という尊い犠牲が必要であることを理解します。それとともに、神は私たちのために一体何ということをしてくださったのかと恐れおののきます。そしてただ感謝し、ひれ伏し、こんな者を顧みてくださる神の恵みを受け取るのです。こうしてその人は天の御国に生きる者とされるのです。この「天の御国はその人たちのものだから」という言葉は現在形です。その人はこの地上にある時から天の御国の祝福に生き始めるのです。その祝福を今ここで真実に味わいながら、その最終的な完成の日を目指して歩む者となるのです。

果たして私たちはどっちの道を進んでいる者でしょうか。この世の人々と同じ道を行く者でしょうか。それともイエス様が言われた真の幸いの道を行く者でしょうか。いつの間にかこの世と同じ考えになって、自分を持ち上げ、自分をアピールし、自分はすごい人だと周りの人々に思わせて祝福の階段を上ろうとする私たち。しかしイエス様によれば、そこには真の幸いはない。私たちは山上の説教の最初の言葉をよく心に留めて、間違った道を行かないようにしたいと思います。イエス様はまず言われました。「心の貧しい者は幸いである」と。このことをしっかり覚えておけばキリスト教のエッセンスはつかめたとと言っても過言ではありません。私たちが心の貧しい者となるための方法、その第一の方法はやはり聖書に聞くことです。神の御言葉に聞き、その鏡の前で自分の真の姿を教えていただくことです。すべてを刺し通し、判別する御言葉の光の前で、そこにさらけ出される自分の姿をそのまま認めること。何も良いものがない自分、貧し過ぎる自分、黒い罪だけが渦巻いている自分、神のあわれみがなくては一時も生き延びることのできない自分……。しかしその人こそ真に幸いな人だと聖書は語っています。その人は神の国をもたらすために来たイエス様によって、今この時から神の恵みの支配に生かされる者となります。そしてその幸いは、やがて最終的に成就する天の御国の幸いにそのままつながって行くものなのです。